

# 魂の「身体からの独立」と「現実との接触」

—『物質と記憶』におけるベルクソンの心—身関係論—

本 田 裕 志

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) の諸著作中、『物質と記憶 (Matière et mémoire)』は最も難解な書として知られている。この難解さは、第一章に述べられた物質=イマージュ (image) 説と、それに基づく純粋知覚 (perception pure) の理論の斬新性や、第四章に展開された一種の形而上学思想の高度な独創性もさることながら、就中、第二章・第三章を通じて繰り広げられているところの、記憶 (mémoire)<sup>1)</sup> の現象についての精細な研究に基づく心—身関係論の晦渋さに由来するところが大であると思われる。この部分においてベルクソンは、専門研究者たちの手で蒐集された<sup>メモワール</sup>記憶についての豊富な実験的研究資料、とりわけ失語症 (aphasie) を中心とする記憶 (souvenir) の再認 (reconnaissance) の疾患に関する臨末的記録を駆使しつつ、記憶の働きの仕組みを身体と精神の両面に即して解明してゆくのであるが、<sup>メモワール</sup>記憶についてのこの研究が、いかなる道筋を通じて、いかなる心—身関係論へと導くのかということ、到底一読にして明らかになるような体のものではない。本稿は、とくにこの点に聊かなりとも光を当てることを主眼としつつ、同書のこの部分の解釈を試み、さらには、「魂 (精神) の身体からの超越ないし独立性」および「身体を介しての魂 (精神) の『生への注意』あるいは『現実との接触』」とでも要約されよう二つの特徴的側面を手掛りとして、同書の心—身関係論が示唆ないし含意するであろう倫理的意味をも模索的に探求しようとするものである。

<sup>メモワール</sup>記憶に関するベルクソンの研究は、通常同一の現象として区別なく「<sup>メモワール</sup>記憶」

の名で呼ばれているもののうちに、本性を具にする二つの形態を区分することから始められる。この二つの形態とは、(i)運動機構 (mécanismes moteurs) ないし習慣 (habitude) としての記憶<sup>メモワール</sup>、(ii)過去の記憶<sup>スヅネール</sup>をイメージの形で留める記憶<sup>メモワール</sup>、の二つである。

(i)運動機構ないし習慣としての記憶とは、例えば、われわれが一連の学課内容——掛け算の九九・一篇の詩歌・経文など、さまざまな例を挙げ得る——をすらすらと誦誦できるような形で覚えたり、ダンスや体操などの運動の一連の動作を正しく行ない得るようにしたりする場合に働かせている記憶<sup>メモワール</sup>である。この種のをわれわれが覚えるのは、同一の練習・努力の反復によってであり、そして一旦覚えられると、経文の冒頭の一旬は残りすべての経文を、ダンスの最初の動作はそのダンスの全体を、放っておいても連れ戻る、といった具合に、意志の最初の衝動<sup>スグネール</sup>が与えられれば一連の記憶の全体は自動的に再現される。かかるケースにあっては、いわば口が経文を、身体がダンスを、文字通り「身についた」習慣として覚えているのであって、ここには専ら身体の運動のみが関与しており、心の中で何か全然別のことを考えたり思い描いたりしていても、一たび開始された誦誦や動作は、もしそれらが充分よく覚えられたものであるならば、その続行に支障を来さない、という事実が示すように、表象やイメージは関与していない。

かかる記憶<sup>メモワール</sup>は、より一般的に性格づけるなら、知覚される対象や状況が身体に与える刺激に対して身体が用意している応答の総体、ということができる。『物質と記憶』第一章でベルクソンが与えている定義によれば、知覚<sup>2)</sup>とは、「イメージの総体」としての物質界<sup>3)</sup>の中で、われわれの身体——これも一つのイメージであるが、他のイメージから受ける作用に対して、純粋に機械論的な反作用によってではなく、可變的・不確定的な行動によって応答することのできる特殊なイメージである<sup>4)</sup>——の可能的行動に関係づけられたイメージ、言いかえれば、身体にその可變的行動によって適応的に応答することを求めるイメージ、要するに身体に対して利害関係のある作用ないし影響を及ぼしているイメージ、のことに他ならない<sup>5)</sup>。それゆえ知覚は常に、これに応答するところの——別の言い方をすれば、知覚を延長する (prolonger)

ところの——身体の少なくとも生れかけの運動的反應ないし態度を喚起する。かかる運動的な反應ないし態度は、当初は必ずしも知覚された状況に正しく適応しないかも知れないが、類似の知覚が繰り返し体験されるうちに、これに適応する運動習慣のシステムとも言うべきものが身体に刻印され、遂には、類似の知覚が与えられると、自動的に、知覚された状況が身体に対して有する利害に応じた適応的な行動を開始し得るようになる。身体内に形成されたかかる運動習慣のシステムが、運動機構、あるいは運動装置 (appareils moteurs または dispositifs moteurs) と呼ばれるものなのである。

ところで、われわれの身体には、中枢を介して末梢から末梢へと至る神経繊維が存在し、周囲のイマージュからの身体への作用、言いかえれば知覚対象が身体に与える刺激は、感覚器官から求心神経を通過して中枢に達し、さらに遠心神経を通過して末梢に戻り、身体の運動すなわち行動となって現われるのが認められる。したがって、知覚に適応した行動を可能ならしめる運動機構は、神経系のこの道筋のうちその座を占めると考えられる。一般に髄 (moelle) ・脊髓 (moelle épinière) ・延髄 (bulbe) などと呼ばれる諸中枢こそは、まさにこの座に他ならない<sup>6)</sup>。しかしながら、求心神経とこれらの諸中枢との間には、より高次の中枢、すなわち脳 (cerveau) が介在しており、求心神経を通じて伝えられた刺激は、ここで進路を選ばれて、限りなくさまざまな運動機構へ到達できるようになっている。いわば脳は、一種の「中央電話局 (bureau téléphonique central)」(M. M., p. 26.) の如きものであって、脳のかかる機能と、経験による運動機構の多様化とによって、身体は知覚された状況に対し、可変的な、随意的に選択された行動をもって応答することができる。それゆえ、身体の中において脳—神経系は、知覚に適応する運動のストックとも言うべき運動機構を構築・装備するとともに、知覚と運動機構との関係づけの限りなく多様な選択を可能にすることによって、知覚された周囲の状況に対する身体の可変的な適応行動を確保するという機能を有するもの、言いかえれば身体の感覚—運動平衡 (équilibre sensori-moteur) を司るものである。そして運動機構としての記憶<sup>メモワール</sup>の働きは、かかる感覚—運動平衡の現われであり、この記憶<sup>メモワール</sup>による対象の再認は、身体による対象への適応運動の作動に他ならず、心に

よって思い浮かべられる再認には非ずして、身体によって演じられる再認であり、それは既述の如く、一旦開始されるや自動的・機械的に遂行されてゆくのである。

(ii) 今一度、経文やダンスの例に戻ろう。われわれは繰り返される練習を通じて、運動機構としての記憶<sup>メモワール</sup>に訴えてこれらのものを習得する。しかしながら、このようにして獲得される記憶<sup>スヴニール</sup>とは別に、各々の練習の際の個別的状況——某月某日の某時刻に経文を誦習していた時、途中で来客があって中断されたとか、ダンスの何回目のレッスンの時、それまではどうしてもできなかった難しいステップがマスターできて嬉しかったとかいった状況——について、覚えようとするでもなしに覚えられている記憶<sup>スヴニール</sup>があることは容易に気付かれよう。そして第一の記憶<sup>スヴニール</sup>が、内容上は常に同一性を保ちつつ、反復練習によって次第に完全化されてゆくのに対し、第二の記憶<sup>スヴニール</sup>は、各々がいわばその日付を有し、独自の個性・一回性を示しつつ、初めから完全に覚えられており、しかもそれは身体の運動習慣としてではなく、イメージの形で心に留められているのである。それゆえ、この第二の記憶<sup>スヴニール</sup>が覚えられる際に働いている記憶<sup>メモワール</sup>は、運動機構としての記憶<sup>メモワール</sup>とは全く本性を異にしており、しかもベルクソンによれば、記憶<sup>スヴニール</sup>をイメージの形で留めるこの記憶<sup>メモワール</sup>こそが「真の記憶 (la mémoire vraie)」

(M. M., p. 168.) である。これが彼によってしばしば「純粋記憶 (mémoire pure)」の名で呼ばれる記憶である。

純粋記憶<sup>メモワールピュール</sup>は、意識の最初の目覚め以来われわれが体験してきた一切の出来事や状況のイメージを、それらが生起するにつれ、そのままの順序で、あらゆる瞬間に絶えず、しかもどのような細かい点をも遺漏することなく、列挙的に保存する。そしてかかる保存については、何か特殊な「容れ物」やメカニズムを引き合いに出して説明することは必要でもなく適切でもない。例えば、われわれがある複音節語を発音する場合、最終音節を発する瞬間には以前の音節は過去に属しているが、われわれの意識には語全体が現前している。(さもなくば、これらの音節はわれわれに対して単一語の体を成し得ないであろう。) 同様に、一つの文<sup>センテンス</sup>の中で読まれているすべての単語は、意識の視野がこの文<sup>センテンス</sup>の全体へと拡張されれば、すべて現在の意識に上り得るし、さらにわれわれ

の半生の歴史全体も、仮に意識がその全体の脈絡を一つの文<sup>センテンス</sup>の如きものとしてとらえ得るほどにまで拡張し得るとしたら、すべて現在の意識に現前するであろう。このように、われわれの心的生においては、現在の意識と過去の記憶との間の決定的な境界線というものはなく、過去の全記憶<sup>スヴニール</sup>の保存は、《souvenir》の《nir》が発せられる瞬間に《souve》が意識に保存されていることが説明を要しないのと同様、説明を要しないのである<sup>7)</sup>。現在における行動を司ることを主要な役割とする意識の実践的性格<sup>8)</sup>のゆえに、ごく一部を除いて過去の記憶のイメージは意識の光に照らされないままであるが、それらは決して存在することをやめたのではなく、これもイメージに他ならぬ物質的対象が、われわれによって知覚され意識されることをやめても、意識されざるイメージ、すなわち一種の無意識的心理状態 (états psychologiques inconscients) として存在し続けるのと同様<sup>9)</sup>、無意識的心理状態として、すなわち潜在的・無力的な在り様において、存在し続けているのである。かかる<sup>スヴニール</sup>記憶は「純粹記憶 (souvenir pur)」と呼ばれ、これはベルクソンによればまさしく「精神の発頭 (une manifestation spirituelle)」であり、われわれは純粹記憶<sup>メモリアルビニール</sup>の現象において精神そのものをとらえることになる、と言われる<sup>10)</sup>。

それでは、かかる<sup>メモリアルビニール</sup>純粹記憶による再認は、どのようにして行なわれるのであろうか。さらに、この記憶<sup>メモリアル</sup>と先の運動機構としての記憶<sup>メモリアル</sup>の間には、何らかの関係が存するのであろうか。また存するとすれば、それはいかなる関係であらうか。

## 二

ベルクソンは、『物質と記憶』第三章の中で、底面 AB を上に、頂点 S を下にして平面 P 上に立つ円錐形 SAB の図<sup>11)</sup>によって、記憶の世界を表現している。以下、この図を手掛りとしつつ、二種類の<sup>メモリアル</sup>記憶の関係と、イメージの再生を伴う再認——ベルクソンはかかる再認を「注意的再認 (reconnaissance attentive)」と呼ぶ——のプロセスについての同書の所説の解明を試みよう。

上述の図において、(i) 平面 P は、現在の瞬間における物質界の全体を表わ

す。ベルクソンの独特な表現を用いるなら、それは、固有のリズムの持続をもって流れる宇宙的生成の「瞬間的切断面 (une coupe instantanée)」<sup>12)</sup> である。(ii)円錐の頂点Sは、身体を表わす。SはPに接しつつ、絶えず図の下方すなわち未来の方向へと前進する。なぜなら、Pは持続する宇宙的生成のその都度の現在を表わし、S(身体)は常にP(物質界)の一部をなすイマージュだからである。(iii)円錐の底面 AB は、われわれの過去の生における一切の出来事の、細大漏らさぬ<sup>スヴニールピュール</sup>純粹記憶の全体を表わす。この底面は過去の内に不動のまま留まる。(iv)ただし、これらの<sup>スヴニール</sup>記憶は、底面 AB のみならず、全体の拡張・収縮の程度に応じて円錐の断面 A'B'・A''B''・……のすべての水準に位置をとることができる。この場合、拡張の度が大きいほど、言いかえれば底面 AB に近い水準に位置するほど、<sup>スヴニール</sup>記憶は個性的かつ豊富であり、収縮の度が大きいほど、つまり頂点Sに近い水準に位置するほど、<sup>スヴニール</sup>記憶は没個性的・一般的な性格を呈する。さて、如上の諸点から観取されるように、<sup>スヴニール</sup>身体<sup>スヴニール</sup>の感覚一運動平衡のシステムに他ならぬ運動機構としての<sup>メモワール</sup>記憶は、円錐の頂点Sに位置づけられ、これに対して<sup>メモワールピュール</sup>純粹記憶の世界は、Sを除く円錐全体によって表わされ、「第一の<sup>メモワール</sup>記憶は第二の<sup>メモワール</sup>記憶によって経験の動く平面に挿し込まれた動的尖端に他ならぬ」(M. M., p. 169.) かのような様相を呈している。

ベルクソンによれば、イマージュの再生を伴う注意的再認は、この二種類の<sup>メモワール</sup>記憶の緊密な連携の下に遂行される。彼の説くこの再認のプロセスを、円錐の図を用いつつ、要約的に記述してみよう。なお、ベルクソンは再認の現象の解明にあたり、後述するような事情から、<sup>スヴニール</sup>ことば<sup>スヴニール</sup>の記憶の再認の疾患についての研究記録を自説の傍証として利用することが多く、注意的再認のプロセスについても、とくに<sup>スヴニール</sup>ことば<sup>スヴニール</sup>の聴覚的記憶の再認を例として語っている。それゆえ以下の要約的記述も、同じ実例に照らし合わせつつ進めるのが好便であろう。

(i)注意的再認も、その第一歩は身体の運動である。物質界中のあるイマージュ(平面P内のある点)が身体(S)に利害関係のある作用を及ぼすとき、すなわちこのイマージュが知覚されるとき、運動機構を装備した脳一神経系の働きによって感覚一運動平衡を保たれている身体は、この知覚に適応するための運動を開始しつつ準備する。さて、この運動がそのまま遂行されれば、知覚の

再認は身体によって演じられる再認、すなわち運動機構としての記憶による再認として行なわれることになる。しかしこの運動は、生まれかけの状態に留まりつつ、知覚の「輪郭」ないし「顕著な特徴」<sup>13)</sup>を、言いかえればそれがこのこの身体運動を喚起するというその側面を、強調的に示すこともあり得る。ことばの聴覚的再認の場合にあっては、ことばの音声の聴覚的知覚が、ある生まれかけの身体運動——このことばの発音運動そのものの大筋ないし主要方向を表わす運動——を喚起するのであって、ベルクソンによれば、連続的音声として与えられることばの聴覚的知覚が音節や語へと分節され得るのは、この運動によってであるという。彼はこの運動を、聞かれたことばの「運動的図式 (schème moteur)」と呼んでいる<sup>14)</sup>。

かかる身体運動は、注意的再認において二重の役割を演じる。第一に、「機械的再認を惹起する運動は、一方では、イメージによる再認を妨げる」(M. M., p. 104.)。なぜなら、それは神経系の感覚—運動平衡の現われとして、知覚された状況に適応した有用な運動であるゆえ、われわれの意識——それは、既に言われたように、現在の行動を司ることを主要な役割とする実践的性格のものである——が、この状況と無関係な、現在の感覚—運動平衡を乱す恐れのある過去の記憶にその光を及ぼすことを許さないだろうからである。かくてわれわれは、過去の全体験についての細大漏らさぬ純粋記憶を有するにもかかわらず、通常それらは制止され、外見上忘却されている。しかしながら、この同じ運動は「他方では、イメージによる再認を助ける」(ibid.)。というのは、過去の記憶の中で、現在の状況に類似している記憶——これはつまり、この同じ身体運動に嵌まり込む記憶、より正確に言えば、この運動を喚起し、これによって適応されるような過去の状況の記憶、の謂であり、それはまた、後述するように、現在の状況を照らし、行動を有効に導くことによって、感覚—運動平衡を補強する記憶なのであるが——のみは、この制止を受けずに意識の内へもたらされるので、この身体運動は、無数の記憶群の中から特定の記憶の選択を準備するところの、知覚と記憶との共通の枠として働くことになるからである。

(ii)次に、われわれは現在から離れて過去の内へと「一挙に (d'emblée)」移

行し、身体運動の働きによって選択され限定された過去の一領域に到達する。すなわち頂点Sから円錐の内部へと上昇し、再生さるべき記憶へと達するわけである。そしてこの際、現在の感覚—運動平衡によって静止されながらも、常に記憶の可能な最大部分を現在に入りこませようとする純粋記憶は、現在からの呼びかけに答えて、純粋記憶の全体を、現在の身体運動に嵌まり込み得るだけの一般性を示す水準にまで収縮しつつ下降させる（移転 translation）とともに、この運動に嵌まり込む当の側面のみを呈示する（自転 rotation sur elle-même）<sup>15</sup>。先の例に従えば、あらゆる純粋記憶の中から運動的図式の示唆する当の諸語の諸記憶が呈示される（自転）と同時に、過去におけるこれらの諸語の全用例の独立な諸記憶（AB の水準）から、各語の諸用例の記憶をいわば集約的に含蓄する諸観念<sup>16</sup>（A'B'・A''B''・……等の水準）への収縮・下降がなされる（移転）のであり、それとともに「聴き手は一挙に対応する諸観念のうち身を置く」（M. M., p. 129.）のである。

(iii)このようにして見出され到達された記憶は、続いて、潜在的なイメージから現実的なイメージへ、すなわち「記憶イメージ (souvenir-image)」の状態へと現実化される。言いかえれば、A'B'・A''B''・……等の断面に位置をとった記憶が、平面P内の知覚されているイメージと同様に、身体(S)に利害関係のある作用を及ぼし、このイメージと一緒に身体運動を喚起することによって、この運動に嵌まり込みつつ、それ自身現在の知覚の一部となり、平面P内のイメージの知覚に重なり、これを覆うに至るのであって、これによってわれわれは、知覚において対象をそれと認知・理解することになり、再認が成立する。ペルクソンが、具体的知覚は「それを解釈しつつ補完する記憶イメージによってすっかり浸透されている」（M. M., p. 147.）ということを頻りに強調する<sup>17</sup>のは、この意味においてである。ことばの聴覚的再認の例に即して言えば、「諸観念、すなわち記憶の奥底から喚起された純粋記憶が、次第に運動的図式へ入りこみ得る記憶イメージへと展開される。」（M. M., p. 140.）あるいは「われわれが観念を、運動的図式へ入りこんで聞えた音を覆うことのできる聴覚的記憶イメージへと展開する。」（M. M., p. 135.）などと言われるプロセスがこれである。



しかしながら、<sup>スヴニール</sup>記憶がこのように身体運動を喚起しつつ、潜在的イメージの状態から現実的な<sup>スヴニール</sup>記憶イメージへと現実化されるためには、<sup>スヴニール</sup>記憶は身体に、より特殊的には神経系に、物質界(平面P)中のイメージが与えているような刺激を与えることができなければならない。ところで、物質界のイメージが神経系に刺激を与えるのは感覚器官を通じてである。<sup>スヴニール</sup>記憶についても、何かこれに対応する働きをする器官が、身体の中にあるはずだ。ベルクソンは、一般に「イメージの中枢 (centres d'images)」と呼ばれている脳内の部位こそは、かかる器官に他ならないと主張する。それは「感覚中枢に関して感覚器官と対称をなす器官」(M. M., p. 145.)であり、聴覚の例に従えば、現実<sup>スヴニール</sup>に話されていることばの音を聴きとる耳に対して、<sup>スヴニール</sup>記憶の底から想起されてくることばを聴きとる「心の耳 (une oreille mentale)」(M. M., p. 144.)の如きものである。

(iv) 如上の再認のプロセスは、ただ一度限りで完結されるものではなく、一種の回路 (circuit) を形成しつつ、円錐の頂点Sと底面 AB との間のさまざまな断面に対して、無数回繰り返される。言いかえれば、注意的再認においてわれわれの心的生は、<sup>メモワール</sup>記憶の無数の異なった水準において反復されるのである。この反復とともに、<sup>メモワール</sup>純粋記憶の拡張 (expansion) がなされ、<sup>スヴニール</sup>想起される記憶は次第に底面 AB に近い断面へと上昇してゆき、個性化・豊富化される。すなわち「星雲が、ますます強力な望遠鏡のうちで見られるにつれ、次第に数を増す星々へと変ずる」(M. M., p. 184~185.) 如くに、現在の状況に類似した状況の数多くの個別的<sup>スヴニール</sup>記憶が、各々の細部をますます明らかに示しつつ、また各々の前後の状況についての<sup>スヴニール</sup>次第に詳細化する諸記憶を伴い、しかもそれらの内に一層正確に自らを位置づけ (localiser) つつ、現在の知覚の内へもたらされるのである。その結果、知覚は豊富化・判明化されてゆき、現在の状況・対象そのものの細部や、その背後にある諸々の関連状況が次第に深くとらえられることになる。ことばの聴覚的再認の例に即して言えば、聴取され再認された諸語の、以前に経験された諸用例や、それらがいかなる前後の脈絡の中で、いかなるニュアンスをもって用いられていたか、といった事情等が想起されることにより、聴取された諸語が一層的確さ・微妙さをもって解釈されるので

ある。『物質と記憶』第二章の中の、どこか口を開けた貝を連想させる奇妙な図<sup>18)</sup>は、まさにかかる事態を表わしたものであって、この図においてOは現在の知覚の対象に、実線A・B・C・Dは、反復される再認プロセスにおいて順次到達されてゆくところの、次第に円錐図の底面 AB に近づいてゆく諸断面に、それぞれ対応しており、また破線B'・C'・D' は、それに伴って次第に明らかになってくる知覚対象の関連状況の体系を表わしている、と考えられる。

それゆえ、注意的再認の現象を次のように意味づけることが可能であろう。それはすなわち、身体の周囲の状況が身体に利害関係のある作用を及ぼし、身体の適応運動すなわち行動を喚起する際、この状況に類似した過去のさまざまな状況や、それらの前後の近接的状況を現在の意識に呈示し、行動の選択・決断を照らし導くこと、言いかえれば、<sup>スヴィニールビュール</sup>純粋記憶として蓄積された「過去の経験を、現在の行動のために利用すること」(M. M., p. 82.)としての意味づけである。かくてわれわれは、単に身体の感覚—運動平衡のみによっては不可能な、予見不可能な自由な行動をもって、周囲の物質的状況に対してきわめて柔軟に<sup>メモワールビュール</sup>適応することが可能となる。いわば注意的再認は、<sup>メモワールビュール</sup>純粋記憶たる限りでの精神による、身体行動の自由化の現象とみなされ得るであろう。

### 三

以上は、『物質と記憶』第二章・第三章の文脈から抽出する形で、ごく概略的・要点整理的に述べられた、ベルクソンの<sup>メモワール</sup>記憶理論・再認理論のあらましである。しかしながら、同書のこの部分の最大の特色の一つは、失語症に代表される再認の疾患についての臨床的・実験的研究資料の示す諸事実に照合しつつ、従来の<sup>メモワール</sup>記憶理論の不充分な点を明らかにし、逆に自らの<sup>メモワール</sup>記憶理論の正しさを立証してゆくというその手法にある。それゆえ本章では、ベルクソンがこのような実験的事実に訴えつつ従来の<sup>メモワール</sup>記憶理論と対決してゆくそのしかたを概観してみよう。もっとも、このしかたは非常に多角的であるので、ここではごく主要な点に限って述べることになるのもやむを得ない。

はじめに、彼が自らの<sup>メモワール</sup>記憶理論をもってそれと対決するところの従来の<sup>メモワール</sup>記憶

理論がいかなるものかを明確にしておく必要がある。それは、記憶<sup>メモワール</sup>の全現象を脳の機能によって説明する理論、すなわち記憶<sup>スヴニール</sup>がすべて脳の特定部位のうち、脳細胞の物理的・化学的変様等の形で蓄積されるとする理論である。この理論によれば、再認のプロセスは、イメージを伴う場合も含めて、すべて求心神経を通じて感覚中枢に達した知覚の刺激が、さらに記憶<sup>スヴニール</sup>の蓄積されている部位に伝達されて、そこに眠る記憶<sup>スヴニール</sup>を呼び覚ますこととして説明され、また再認の疾患は、脳のこの部位の傷害によって、蓄積されていた記憶<sup>スヴニール</sup>が破壊されるか、あるいは知覚の刺激が感覚中枢からこの部位へ導かれる通路にあたる部位の傷害によって、知覚と記憶<sup>スヴニール</sup>の再会が妨げられるか、いずれかの原因によって生ずると説明される。この理論は一見したところ、一般的には精神盲(cécité psychique)・精神聾(surdité psychique)等の再認疾患、特殊的には言語盲(cécité verbale)・言語聾(surdité verbale)等の失語症すなわちことばに関する再認疾患が、脳の特定部位の傷害によって生ずる、という観察された事実によって、正当化されるように思われる。しかしながらベルクソンは、それが実はそうではなく、仔細に検討してみれば、実験的事実はこの理論を否認し、彼自身の理論の正しさを証明するという。

この点に関して最も重要な事実は、イメージを伴う再認の疾患に、全く種類を異にする二つの型が見分けられる、ということである。すなわち、(i)記憶自体は喚起され得るが、対応する知覚に正しく当て嵌まらないケース、(ii)記憶の喚起そのものが不可能になるケース、の二つである。このそれぞれのケースにおいて、実験的事実はどのようにベルクソンの理論を傍証し、従来の理論を否認するのであろうか。

(i)第一の型の再認疾患は、従来の記憶理論<sup>メモワール</sup>に従えば、知覚の刺激が感覚中枢から記憶<sup>スヴニール</sup>の蓄積されている部位へ伝達される通路に当たる脳内の部位が傷害を受けて、この伝達が不可能になったものとして説明される他はない。しかしながら、ことばの聴覚的再認の疾患たる言語聾においてこれに該当するケース、すなわち聴覚的記憶<sup>スヴニール</sup>と聴覚とを無傷のまま保っている言語聾を例にとってみると、かかる説明の不備は露呈される。なぜなら、全く未知の外国語による会話を傍聴する際にはっきりと体験されるように、生の所与的知覚<sup>なま</sup>は連続的な音声

であって、予め音節や語へと分節されているわけではないので、たとえ知覚が脳内の傷害によって遮断されることなしに語の記憶の眠る部位に達し得たとしても、それだけでは再認は成立しないだろうからである。

これに対して、ペルクソンの記憶理論に従えば、言語聾のかかるケースは、運動的図式を形造る機能の不全として、言いかえれば、知覚の刺激を受けてこれに適応する身体運動を開始する感覚—運動平衡の機能が脳の傷害によって損われたケースとして、説明され得ることになる。既述の如く、運動的図式こそは、連続的音声以上のものではないことばの生の聴覚的知覚を音節や語へと分節するとともに、想起されるべき記憶の選択・限定を可能ならしめる当のものに他ならないから、これを冒された患者は、自国語の会話を聴く場合にも、未知の外国語と同様に、それを混然とした物音として聴くのみとなり、聴覚的記憶も聴覚も全く正常であるにもかかわらず、再認することができなくなるのである。このことは、患者たち自身の証言ともよく一致する、とペルクソンは言う<sup>19)</sup>。

(ii)第二の型の再認疾患は、従来の記憶理論によれば、脳内の特定部位の物質的変様ないし状態として蓄積された記憶が、この部位の傷害によって破壊されたものとして説明される。しかしこの説明も、言語聾——この場合は、語の聴覚的記憶の喚起が不可能になる型の言語聾——を例として考察すると、次のような多くの困難を伴うことがわかる。(i)同一の語の聴覚的知覚は、この語が音色や高さの異なった声で言われるとき、物理的には別の音の知覚であり、これらの知覚の記憶が脳内に物質的変様として蓄積されるとすると、それらも互いに別の変様となるはずである。その上、通常の会話では、語は孤立した状態においてではなく、句の中で、前後の諸語と有機的に連関した状態で現われ、文脈に応じて同一の語も異なった意味合いを帯びる。それゆえ、語が常に同じ音色・同じ高さの声で、型の決まった句の中で言われるのでない限り、脳内の記憶が破壊されず、語の聴覚的知覚の刺激がこの語の記憶に到達したとしても、この刺激は素通りしてしまい、再認は成立しないであろう。(ii)聴覚的記憶の喚起が不可能になる言語聾は、もし脳内の記憶の破壊を原因とするならば、ある一定の語の記憶は全く消滅し、他の語の記憶は完全に保存されている、という

形をとるはずであるのに、実際には、<sup>スヴニール</sup>記憶の数の減少ではなく精神的聴取機能の減退という形をとるのが普通である。もっとも、特定の<sup>スヴニール</sup>諸記憶の喚起が不能となるケースもあるにはあるが、このケースでは、一見失われたかに見える<sup>スヴニール</sup>記憶が実際は現前し活動していると考えられるケース<sup>20)</sup>を除けば、語の<sup>スヴニール</sup>記憶の消失は固有名詞→普通名詞→動詞という規則的順序に従う。従来の理論はその理由を説明することができない。(v)また従来の説明では、<sup>スヴニール</sup>記憶を蓄積する脳内の部位と感覚中枢との異同も問題となる。なぜなら、<sup>スヴニール</sup>記憶はイマージュとして喚起されるにつれて何時<sup>いつ</sup>とはなしに知覚に重なってくる、という事実はこの両部位の同一性を、また言語聾・精神聾が決して聴覚自体の喪失・不全を伴わない、という事実はそれらの相異性を、それぞれ示唆して譲らないからである。

他方、ベルタソンの理論に従えば、かかる困難は解消され得る。まず(i)の点については、運動的図式の働きと、<sup>メソフォルビュール</sup>純粹記憶の収縮・拡張とを考えに入れればよい。知覚に適応しようとする身体運動は、諸知覚が相互に微妙な差異を示している、身体に対するそれらの利害関係が同一ならば同一である<sup>21)</sup>。したがって運動的図式も、互いに物理的差異を示す同一語の音声の聴覚的諸知覚に対して、この語の発音運動の大筋を表わす同一の運動として生起し、この同じ運動に嵌まり込む同一語の<sup>スヴニール</sup>記憶を選択するのである。そしてその時には一般性の強い観念の水準にまで収縮している<sup>スヴニール</sup>記憶は、その後再認プロセスが回路状に反復されるにつれて多数の個別的<sup>スヴニール</sup>記憶へと拡張するので、さまざまな文脈の中でさまざまなニュアンスを示すこの語の、その都度適切な解釈を可能にするであろう。次に(ii)の点については、この型の再認疾患が、<sup>スヴニール</sup>脳の傷害のために、<sup>スヴニール</sup>記憶から身体への刺激を感取する器官としての「イマージュの中枢」が冒されることによって生ずる、と考えればよい。この場合、言語聾が通常<sup>スヴニール</sup>精神的聴取機能の減退として現われることは至極当然であり、また特定の語の<sup>スヴニール</sup>記憶が文法的順序に従って消失するケースも、「イマージュの中枢」の機能が低下し、<sup>スヴニール</sup>記憶に由来する印象が身体運動を惹起することが次第に困難になってゆく際、動作を表わす動詞の<sup>スヴニール</sup>記憶は最も身体運動の反応を得やすいために最後まで感取され、逆に動作との関連の薄い<sup>スヴニール</sup>固有名詞の記憶は最もかかる反応を得にくいために、真先に感取不能となるのだ、と説明される。同様にして(iii)の困難も解決され

る。なぜなら、感覚中枢は、感覚器官から来る知覚の刺激と、「イマージュの中枢」から来る記憶スヴニールの刺激とを同時に受容しうるであろうから、記憶イマージュスヴニールが知覚に重なり得るのは当然であり、また「イマージュの中枢」が冒されて言語聾・精神聾が生じて、感覚器官と感覚中枢が正常であれば、聴覚自体は冒されないはずだからである。

このように、実験的事実に基づく考察は、一致して従来の記憶理論メモワールの欠陥とベルクソンの記憶理論メモワールの正しさを明らかにし、注意的再認の疾患を惹起する脳の傷害が、記憶自体を破壊するのではなく、この再認のプロセスの中で身体の感覚—運動機能にかかわる二つの部分的プロセスのいずれかを不能にすることによって、再認の成就を妨げるものであることを示唆している、とベルクソンは主張するのである。

#### 四

『物質と記憶』第二章および第三章の記憶研究メモワールの骨子は、ほぼ以上の通りである。次の課題は、この記憶研究が導くべき心—身関係論を明らかにすることである。同書中でしばしば語られるように<sup>22)</sup>、ベルクソンが記憶研究メモワールを手掛けたのは、それが心—身関係の問題を最も具体的に、事実<sup>メモワール</sup>に立脚しつつ解明するための捷徑に他ならぬからであり、この心—身関係問題の解明こそは、同書の目的そのものをなしている。それゆえ以下の考察は、まさしく同書の中心的主題にかかわるのである。

(1) 既述のように、失語症（言語盲および言語聾）をはじめとする再認の疾患が、脳の特定部位の傷害によって生ずる、という観察された事実<sup>メモワール</sup>は、この部位に記憶が物質的な変様ないし状態として蓄積されるとみなすことにより、記憶の現象を全く脳の機能に還元してしまう記憶理論メモワールにとって、そしてさらには、記憶を含む精神現象一般を脳の機能から説明する心—身関係論にとって、最も有利な論拠を与えそうに見える事実である。しかるにベルクソンの記憶研究メモワールは、この事実が決してそのような意味を持たないこと、脳の傷害が冒すのは再認における感覚—運動的プロセスのみであって、純粹記憶として保存された記憶そのものは破壊されないことを示した。それゆえこの研究によって、心的状

態を脳の状態に付け加わる燐光の如きものとみなす付帯現象説 (épiphénoménisme) にせよ、心的状態と脳の状態の等価性を主張する平行説 (parallélisme) にせよ、あらゆる心的状態が原理上は脳の状態から説明され得るとする一切の説は、その有力な根拠を奪われ、逆に記憶を含む魂 (精神) の働きが、感覚一運動に關与する側面において脳一神経系と連帯していることを認めつつも、それが本質的には脳一身体の機能を越えた独立的なものであることを主張する立場に支えが与えられることになるであろう。脳一身体と魂 (精神) とのかかる関係を表わすために、ベルクソンは次のような彼一流の巧みな比喩を用いている。すなわち、この両者は釘とそれに掛っている衣服のような関係にある。釘を抜けば衣服は落ちるから、両者の間には連帯があるが、さりとて衣服の形状は釘の形状から説明されはしない、と<sup>23)</sup>。また、脳の状態から心的状態のすべてが知られるわけではないのは、役者の動作のみから劇の内容のすべてが知られるわけではないと同様である、とも言われる<sup>24)</sup>。

(ii) しかしながら、ベルクソンの<sup>メモワール</sup>記憶研究が、如上の点と表裏一体をなす形で、次のような点をも明らかにしていることを見落してはならないであろう。それは、たとえ<sup>スグニールピュール</sup>純粹記憶そのものが全く無傷のまま保たれているとしても、脳の傷害によって身体感覚一運動平衡が損われるならば、失語症をはじめ、一般に記憶喪失 (amnésie) と総称されるような種々の再認疾患が生起し、<sup>メモワール</sup>記憶はその正常な機能を維持し得なくなる、ということである。すなわち、脳の受けた傷害のために、知覚の刺激に対する適応運動の不全が生ずるとき、<sup>スグニール</sup>記憶の再生はなお可能であっても、現実の対象と符合する<sup>スグニール</sup>記憶を選択・限定することができないので、現実離れしたとりとめのない再生に終らざるを得ず (第一の型の再認疾患)、また<sup>スグニール</sup>記憶の刺激を身体に適応運動へと結びつける感受器官としての「イメージの中核」が故障するとき、<sup>スグニール</sup>記憶はもはや再生され得ず、潜在的・無力的な状態に留まらざるを得なくなるのである (第二の型の再認疾患)。それゆえ、脳一神経系の機能によって保たれる身体感覚一運動平衡は、<sup>メモワール</sup>純粹<sup>ピュール</sup>記憶の「生への注意 (attention à la vie)」ないしは「現実との接触 (contact avec la réalité)」を確保し、単独では潜在的・無力的・無効果的な<sup>スグニールピュール</sup>純粹記憶に現実性・活力・有効性を付与するものであることが、ここに明らかにされている。

る。ベルクソンは、<sup>メモリアルピュール</sup>純粋記憶がかかる「生への注意」ないし「現実との接触」を喪失した例として、再認疾患の他に、<sup>メモリアル</sup>幼児・未開人の記憶や夢における記憶の働きなどを挙げている<sup>253</sup>。これらのケースにおいて、<sup>メモリアルピュール</sup>純粋記憶は、再生さるべき記憶を現在の行動に必要なもの、言いかえれば現在の状況に類似したもの<sup>スヴニール</sup>のみに限定し制約する身体<sup>メモリアルピュール</sup>の感覚—運動平衡と連帯していないために、その働きは極度の高揚を示している。しかしかかる状態にある純粋記憶は、現実的状况との一切の適応・平衡を失っているので、被制約的な働きしか示さない常態的記憶<sup>メモリアル</sup>に比して、はるかに低い実践的価値しか持ち得ないであろう。同様のことは、<sup>メモリアル</sup>記憶のみに限らず、魂（精神）の働き一般に関しても言われる。すなわち、魂（精神）はその健全な、平衡のとれた状態にあっては、身体<sup>メモリアル</sup>の感覚—運動平衡によって「生への注意」ないし「現実との接触」を維持されており、脳—神経系の疲労・病気・中毒等によってこの感覚—運動平衡が弛緩したり中断されたりした場合には、精神生活全体の平衡もまた失われるのである。ベルクソンによれば、所謂「精神異常（aliénation）」とはまさにかかる状態以外の何物でもないのである<sup>253</sup>。

## 五

最後に、前章において示されたような『物質と記憶』の心—身体関係論が、いかなる倫理的意味を含みうるものであるか、という点についての模索的な考察を試みたい。

(i)同書の心—身体関係論の第一の側面、すなわち魂（精神）が脳—身体を超えた独立的なものであり、心的状態は脳の物質的状态に還元され得ず、またそれと等価でもあり得ない、というこのことは、われわれの思惟や意志が、物質界の支配者たる必然性の法則の支配を免れた自由なものであることの可能性を示すであろう。これは、処女作『意識の直接与件に関する試論（Essai sur les données immédiates de la conscience）』におけるベルクソンの中心的主張の再確認としての意味を持つものと言い得る。

(ii)しかしながら、より重要な、そして処女作からの『物質と記憶』の一大前進を画する点は、かかる自由な魂（精神）が脳—神経系の感覚—運動平衡機能



を介して身体と結合し、「生への注意」ないし「現実との接触」を得ることによって、純粋な思惟や意志のみに限らず、必然性・情性の世界としての物質界の一部をなすわれわれの身体の行動にさえも、制約された形においてとはいえ、自由の余地が与えられている、ということが明らかにされた点であろう。身体メモリアルピュールの感覚—運動平衡と純粋記憶としての精神との緊密な連携の下に遂行される注意的再認が、精神による身体の行動の自由化作用の一例に他ならないことは、本稿第二章の末尾で既に確認された通りである。身体メモリアルピュールの感覚—運動平衡のみに導かれて生きる「衝動的な人 (un impulsif)」、すなわち既出の円錐図の頂点Sにその生の固定されている人は、自由らしい自由をほとんど知ることのない、下等動物にも等しい生を送る人であろうし、また純粋記憶スヴニールピュールの内にのみ生きる「夢想家 (un rêveur)」、すなわち円錐図の底面 AB にその生の固定されている人は、精神の働きにおいてこの上もなく自由であろうが、それを聊かも行動の自由へと具体化することができないであろう<sup>27)</sup>。かくて、同書中で繰り返し語られるように<sup>28)</sup>、正常な心理的生は、決してSまたは AB の一方のみに固定されることなく、この両端の間を常に行き来している。言いかえれば、身体メモリアルピュールの働きと魂（精神）の働きとの密接な連帯の上に成り立つのである。同書の末尾を飾る次のような文章が、ここで思い起こされるべきであろう。「かくして、時間・空間のいずれにおいて考察されるにせよ、自由は常に必然性の内に深く根を張り、必然性と密接に組織されているように見える。精神は物質から知覚を借りてこれから養分を抽出し、自らの自由を刻印した運動の形の下でこれを物質に返すのだ。」(M. M., p. 280.)

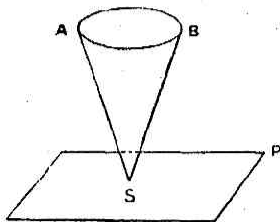
(iii) さらに今一つ、『物質と記憶』の中では明言されていないものの、その後メモリアルピュールに著わされたいくつかの小論の中で<sup>29)</sup>、明らかに同書の心—身関係論の倫理的含蓄としての意味において言及されている重要な点がある。それはすなわち、魂（精神）が脳—身体を超えた独立的なものであり、前者の働きは後者の機能には還元され得ず等価でもない、というこのことが、身体の死によって魂（精神）もまた減ぶ、という主張の根拠を奪い、逆に身体の死後も魂（精神）が存続すること、すなわち魂（精神）が不死であることの可能性・蓋然性を示唆する、ということである。しかしながら、この第三の倫理的含蓄には、あるきわ

めて大きな問題点が認められる。というのは、仮りにもしベルクソンが、魂の身体との結合を前者にとって端的に不幸な、頽落的な状態として把握するような哲学的立場<sup>20)</sup>をとるのであれば、魂の死後存続の可能性・蓋然性は、とりも直さずその救済の可能性・蓋然性を示唆するものとして、積極的な倫理的意義を持ち得るでもあろうが、しかし『物質と記憶』におけるベルクソンが、かかる立場をとっていないことは明らかだと思われるからである。既述のように、同書の心一身関係論によれば、魂は身体感覚—運動平衡との連帯によってはじめて「現実との接触」を得、現実性・活力・有効性を与えられるのであって、心一身の結合は魂にとっての不幸を決して意味しない。否むしろ、たとえ魂が身体の死後もなお存続し得るとしたところで、そのような魂は身体との連帯を失っているために、「現実との接触」を喪失して潜在的・無力的もしくは無効果の状態に押し留められ、夢見る人・幼児・未開人・精神異常者等と同様の精神状態を呈するという可能性・蓋然性をこそ、この心一身関係論は示唆するであろう。それゆえ、同書の所説の一掃結としての魂の不死の可能性・蓋然性ということに何らかの積極的な倫理的意義を認め得るためには、さらに同書の立場を超えて、魂の不死ということに単なる死後存続という以上のより深い意味を与えるとともに、かかる不死の魂にもまた「現実との接触」の道を見出し得るような、より高次の立場への前進が求められる、と言えよう。私見によれば、『道徳と宗教の二源泉 (Les deux sources de la morale et de la religion)』の中で語られる「神秘家 (le mystique)」こそは、このようなすぐれた意味での不死の魂として、また彼の英雄的行動によって魅きつけられ衝き動かされる名もない多数の人々と、今や彼らの手中にある高度の機械技術 (machinisme) とは、神秘家という偉大な魂に「現実との接触」を確保する巨大な身体たるべきものとして、それぞれ描かれたのではないかと思われるが、この点についての詳細な論証は、また別の機会を待って行なうことにしたい。

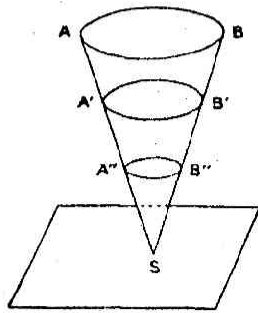
(注)

- 1) 本稿は、mémoire および souvenir の訳語として共に「記憶」を用いたが、以下「記憶」の語が両語のいずれに該当するかを明示するため、「記憶」・「記憶」の如く付記することにする。なお、他の訳語についても必要に応じて同様の付記を行なう場合がある。

- 2) これは純粹知覚のことである。純粹知覚が実際には常に記憶イマージュ (souvenir-image) によって覆われ浸されている、というベルクソンの主張については後述する。
- 3) 物質=イマージュ説は、ごく粗略に要約すれば、「物質はそれ自体としても、われわれが知覚として見・聞き・感じているのと同じ性質・同じ本性のものであって、しかもわれわれによって知覚されていない時にもこの同じ性質・本性を保ちつつ存在し続ける」という説だと言うことができる。ここから、純粹知覚は物質自体の一部分であり、感覚器官等によって新たに産出されるものではない、という主張がなされる。もっとも、身体の可能的行動にかかかわるこの一部分のみがなぜ知覚としてわれわれに姿を現わし、他の部分はそうでないのかということ、身体の可変的行動の能力、就中、脳-神経系の機能との関連でいかに説明するかということ、あるいは知覚が本来物質自体と同じ性質・本性のものであるといっても、実際には、記憶による収縮・記憶イマージュの混入・感情感覚の混入等のさまざまな主観的変様を受けていること等々、物質=イマージュ説をめぐる問題は数多いが、本稿ではこれらの問題についての論究は割愛せざるを得なかった。
- 4) cf. Matière et mémoire, p. 11~12. (以下、引用・参照箇所を示すにあたり、同書はすべて略号 M. M. によって表わす。また頁数は、ベルクソンの他の著作の場合も含め、すべて P. U. F. 版の単行本のものを掲げる。)
- 5) cf. M. M., p. 17, p. 35, p. 38, etc.
- 6) cf. M. M., p. 26, p. 124.
- 7) この点については『精神的エネルギー (L'énergie spirituelle)』55~57頁、『思想と動くもの (La pensée et le mouvant)』167~170頁をも参照されたい。
- 8) cf. M. M., p. 157.
- 9) cf. M. M., p. 158~159. なお、本稿注3をも参照されたい。
- 10) cf. M. M., p. 77, p. 200, p. 270~271, p. 274, etc.
- 11) この図はやや形を変えて二箇所に見られる。そのそれぞれは下に示すようなものである。

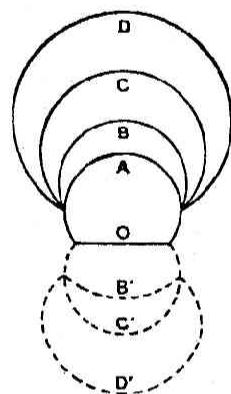


(M. M., p. 169.)



(M. M., p. 181.)

- 12) cf. M. M., p. 81, p. 154, p. 165, p. 166, p. 168~169, etc.
- 13) cf. M. M., p. 107.
- 14) cf. M. M., p. 121, etc.
- 15) cf. M. M., p. 188.
- 16) ここで言われる「観念 (idée)」とは、当然明らかなように、不動な「独立の実体」(M. M., p. 182.) の如き観念ではなく、S と AB との間<sup>の</sup>の多様な水準の一般性を呈し得る記憶を指しているの<sup>が</sup>であって、それゆえ「一般観念は絶えず頂点 S と底面 AB との間を揺れ動くであろう。」(M. M., p. 180.) と言われるのである。
- 17) cf. M. M., p. 30, p. 68, etc.
- 18) この図は右のようなものである。
- 19) cf. M. M., p. 120, p. 127.
- 20) cf. M. M., p. 132~133.
- 21) cf. M. M., p. 178.
- 22) cf. M. M., p. 3, p. 5~6, p. 192, etc.
- 23) cf. M. M., p. 4~5. なお、『精神的エネルギー』36頁をも参照されたい。
- 24) cf. M. M., p. 6~7. なお、『精神的エネルギー』42頁をも参照されたい。
- 25) cf. M. M., p. 170~172.
- 26) cf. M. M., p. 192~196.
- 27) cf. M. M., p. 170, p. 172~173, etc.
- 28) cf. M. M., p. 181, p. 187, p. 192, etc.
- 29) 『精神的エネルギー』27頁および58~60頁を参照されたい。
- 30) 例えばプラトンやプロティノスなどの立場は、かかるものとしてとらえられ得る一面を含むように思われる。



(M. M., p 115.)

(ほんだ ひろし 博士後期課程二回生)